



Title	伝達について : ハイデガー『存在と時間』における ロゴスの両義性
Author(s)	入谷, 秀一
Citation	メタフュシカ. 2000, 31, p. 85-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66634
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

伝達について

——ハイデガー『存在と時間』におけるロゴスの両義性——

入谷 秀 一

序

ハイデガーの言語論は「言葉は存在の家である」(『ヒューマニズム書簡』)という比較的知られた発言について、あるいはヘルダーリンやトラークルを扱った中期以降の詩論、芸術論に關してしばしば話題にされるが、言葉の問題は早い時期から彼にとって重要な関心事であった。とりわけ前期ハイデガーの思索のうちで主要な問題のひとつとなっていたのは、例えば一九二五／二六年の冬学期講義『論理学』で論究されているように、ロゴスの真性と偽性、つまり言葉の持つ或る両義性であり(Vgl. GA21, §11-13)。この問題意識はそのまま『存在と時間』(一九二七)に引き継がれる。以下の論究では、先ず一九二三年の夏学期講義『存在論(事実性の解釈学)』を例に取り上げ、言葉の両義性がいかなる形で前期ハイデガーの関心事となってくるかという、言わば問題の生成過程の現場を追跡し、しかる

のちに本稿のテーマについて述べたい。

『存在論(事実性の解釈学)』によれば、言葉は思考の意のままになる単なるツールではないし、主体による事柄への意味づけの過程で、もしくは或る出来事の内容の経験内容の表明にさいして分節化されて現れる、思考の「末端」にとどまるものでもない。事情は逆であり、意味付与においても経験の分節化にさいしても、プライオリティは言葉のほうに、しかも或る歴史的地平において相互主観的に形成される、公共的で制度的な色彩を帯びた「語り(Rede)」のほうにある、とされる。匿名的な「ひと(das Man)」の集合である不特定多数の「我々」によって日常的に取り交わされる語り、そしてそのうちで貨幣のように流通する言葉によって初めて各人の存在が分節化され、浮かび上がってくる。だが個々の生の在りようが、そうした流動的な言語行為が含意している「さしあたってたいい(zunächst und zumeist)」の意味地平によって反照的に示されるのだとしたら、

この生にしても曖昧な存在ではないか。「我々」は或る物事に
ついて語り、理解し解釈するだけでなく、我々自身が互いに
語りかけられ、解釈されるという受動的な契機のうち絶えず
投げ出されている。従って、自己を知るため、自身が立つ歴史
的な地平を把握するためには、最も身近な言語的営みが示すこ
うした「被解釈性 (Ausgelegtheit)」から出発しなければなら
ない。人間存在の事実的生 (faktisches Leben) の解釈を目指す
この講義において、言葉へと向けられたハイデガーの問題意識
はおおむね以上のようなものであった。故にここでは、言葉そ
れ自体を探究の主題に据えることや、言語一般に関するメタレ
ベルの議論が試みられているわけではない。意図されているの
は、生の把握のために、生自身が依拠している今——ここ(此)の
歴史的意味地平の言語レベルでの「テキスト性」を通して、
我々の経験内容を超越論的に基礎づけている存在論的な構造へ
と遡行することである。生の重層的な位相に沿ってその存在の
意味へと至るために、世界理解について公共的な語りが形成し
ている被解釈性から、理解するという主体的営みの形式や範疇
へ、そしてさらに主体が世界——内——存在することの構造の把
握へと、自己反省を繰り返しながら段階的に遡行すること、こ
れが当時のハイデガーの方法論の大まかな骨組みであった。
(Vgl. GA63, S.35, 85.)

当講義によれば、相互に共有可能な仕方ではなされる言語上の

交渉や配慮を通じて、一定の状況解的的な世界理解の平均性
(Durchschnittlichkeit) が形づくられているという。語りをこう
した側面から捉えるとき、ハイデガーは語りにおいて表明され
る言葉の指し当たった特質をその「公開性 (Öffentlichkeit)」
に見てとる。(Vgl. GA63, S.30-33, 55, 62.) この場合公開性とは、
誰にとっても接近可能な仕方——言わば、世間の目にさらさ
られる形で——或る事柄が解釈可能であること、そして事実、
解釈されて——在るということを意味している。「……出来事
として起こるいかなる事柄もこの被解釈性を免れることはな
い。」(GA63, S.31)

さて、共に平均的に解釈されているという生の事実性に対し
て、実際に「学」として遂行される「解釈すること」は次ぎの
ような方向へ進められる。先ず「世間話 (Gerade)」に見られる
ような、語りの持つ流動的で捉えどころのない曖昧さが取り上
げられ、そうした語りを形成している一種の先行理解の構造が
際立たせられる。ただしこれによって、語りの可能根拠として
の超越論的な地平が何らかの一般的類型へともたらされるわけ
ではない。ハイデガーによれば、我々がおい立つ歴史的地平は、
プラトン、アリストテレスに端を発する形而上学がもたらす概
念図式の歴史的影響下のもとで形成されてきたものであり、こ
うした伝統的な概念図式は、我々の自己理解や世界理解を可能
にしているが、同時に歪めているものであるという意味におい

て、「暴露」と「隠蔽」という両義性を帯びている。ゆえに探究は、伝承された諸先入見によって構造化されている現在の歴史的な意味地平、日常的な語りが展開される今—このトポスを、地平のそうした歴史的背景に向かって自己解釈的に掘り下げると、という形をとる。この場合、自己解釈 (Selbstauslegung) とは、内省的な直観に至ることというより、むしろ自身が置かれてある現在の状況、その歴史的文脈が形成されるに至った哲学的な脈絡やその諸限界を際立たせ批判するポジションを切り開くことであり、ハイデガーの表現でいえば、歴史に対して覚醒して在る (wachsein) という実存的態度を指し示している。(Vgl. GA63, S.15) この態度は、目下支配的な哲学的知見を正面切って批判し分析する前に、先ずこうした知見への生の類落 (Verfallen) の状況を現象学的に描き出すことへと向かうのである。

従って「学」としての解釈の遂行においても、現在の歴史状況に対して「公開的である」という態度は必要不可欠なものとして求められてくる。ハイデガーは述べる。「解釈学は知識の取得ではなく実存的認識を、つまり一つの在ることを目指さなければならぬ。それは被解釈性から、また被解釈性のために発言する。」(GA63, S.18) 解釈学は何らかの超越的な立場への上昇を意味するわけではないし、実存的認識は、もはや言葉が不要な或る心理的境界へと内化するものでもない。自らが伝統

的に解釈され、語られていることから出発する生の自己解釈は、哲学史上の伝承されたディスクールを系譜学的にたどりながら、自己批判的な反省を通じて再びロゴスの局面へと還帰し、自らを表明する。こうした局面において解釈学は現象学的な「記述」と結びついてくるのであるが、これは言わば、最初から歴史的なコンテクストを帯びて現出するテクスト的な生が—というよりハイデガーによれば人間存在とは、もともとそういう形で現に在る (being) ことなのだ—自らを読み、訂正しつつ語るという「自己叙述」の遂行を意味している。従って解釈されてあることの端緒としても、或いは実際の解釈作業の過程においても、言葉の持つ公開性や客観性が探究の重要な基軸であることには変わりなく、このことは、当時はまだディルタイ的な体験、表現、理解といった認識論上のカテゴリーに依拠していた生の自己解釈が、現存在 (Dasein) の実存論的分析論へと存在論化してゆく過程においても、原則的に踏襲されてゆくことになる。

とはいえ、実際に表立って遂行される解釈学におけるロゴスの特徴は、前—自覚的になされる日常的な語りの行為が見せるそれとは異なってくる。既に当講義でハイデガーは「現象学はその可能性からすれば、公開的、自明的ではないものとして把握されねばならない」(GA63, S.74) と述べていた。このことは「存在と時間」が含意している次のような特徴にも反映され

てくる。

私見によれば、ハイデガーによる現存在分析には、現れ(Erscheinung)から現象(Phänomen)への推移、すなわち他の存在者や事柄との関連づけ、代理、代替といった、現れが持つ伝達(Mitteilung)の指示性がしりぞけられ、代わって自らを独自に示しうる現象が取り出されてゆく——それはまた、ハイデガーの言う「現存在とは誰か」という命題に象徴される、非本来的な「我々」から本来的な「私」へと至る道のりである——流れがある。この過程の最終局面では、それぞれの現存在に各自的な「死」の現象が「最も固有で、没交渉的で、追いつき得ない可能性」として呈示されるのだが、現存在のこうした実存的(existenziell)深化に対応する形で、これに関する実存「論」的(existenzial)なロゴスも、世間話から良心の声(Ruf des Gewissens)へとその容貌が変化するように思われる。ここでは語りの本質は、死の可能性とその不安がもたらす無(Nichts)の契機から汲み取られることになるのである。

ではこうした流れは、言わば公開性から非公開性へのロゴスの移行、或るいはロゴスの持つ公開性の否定へと向かうものだろうか。語りの持つ以上のような両義性に関する『存在と時間』でのハイデガーの論究を追跡し、右の問いへの解答を示すこと、これがひとまず本稿のテーマとなる。

一 何が語られ、記述されるべきか

——ロゴスの両義性⁽¹⁾

(一) 現象と現れ——『存在と時間』序論、第七節A

自己解釈の諸段階のうちで、語られるべき現象としての現存在の相貌はいかに規定されるべきか。ハイデガーは『存在と時間』序論で次のような方向性を呈示する。

「際立った意味において《現象》と名づけられなければならないのは……さしあたりたいいは自己を示すものに対して覆蔵されてはいるが、しかも同時に、さしあたりたいいは自己を示すものに本質上属し、しかも、このものの意味と根拠をなすというふうに属している或るものである。」(SZS36)

このテーゼのより具体的な規定へと迫ってみる。自己を示すものは、どのような内容的特徴を含んでいるのか。別言すれば、自己を示すものは、そうでない事象といかにして区別されるのか。ハイデガーはこの区別のメルクマールの画定のために「現象」と「現れ」という概念を取り上げ、両者の区分線として、事象の指示性格の度合いに注目する。これらを図式的に取り出してみよう。

現象…自身を自身に即して示すもの

(das - sich - an - ihm - selbst - zeigende)

…自身をそれに即さない形で示すもの

(das - sich - nicht - an - ihm - selbst - zeigende)

(= 現象の欠如的変容としての仮象 (Schein))

現れ：自身を自ら示さないもの

(das - sich - selbst - nicht - zeigende)

先ず現れについて検討し、これにより現象の境界をいわば消去法的に際立たせてみる。ハイデガーによれば、それは「それ自身を示さない或るものが、自身を示す或るものを通して、自身を告げる」(das Sichmelden vom Etwas, das sich nicht zeigt, durch Etwas, was sich zeigt) (SZS,29) を指している。彼はこれを病気の徴候を例に説明する。身体的異常は、顔の赤らみや熱によって告げ知らされるが、このことは、異常それ自体が顕現するというより、赤らみや熱が異常を暗示する(indizieren) という仕方になされる。だがこうした現れの仕方は、その所在への一義的な方向性を欠くおそれがある。顔の赤らみは、それ自体として見れば、熱があることばかりでなく照明の反射としても受け取られるからである。赤らみ、熱、照明の反射、これらの間にはひとつの指示連関 (Verweisungsbezug) があるが、この指示連関において、互いが互いを告げ、或いは互いを称し、そして互いの代用として機能する可能性が生ずる。

ハイデガーによれば、告げることとしての現われは、確かにその所在の根源を現象に負うものでなければならぬ。なぜな

ら、自己を(他にたいして)示すという、現象が有する際立った様式がなければ「自らを示さないという仕方であらう」という関係性や、告げるものと告げられるものとの指示連関自体が成立しないからである。だが、それでもなお両者の区別は曖昧であり、また曖昧なままにとどまらざるを得ない。別の箇所ではハイデガーは言う。「あらゆる《現示 (Zeigung)》はひとつの指示であるが、あらゆる指示が示すことではない。このことのうちには、あらゆる《現示》は関係であるが、あらゆる関係づけが示すことではない、ということが同時にひそんでいる。」(SZS,77) 自らを示すこと、自らを他へと指示すること、そして自身でない或る他のものが、このものであるかのように立てられること、こうした諸契機によって現象が仮象へ、仮象が現れへと重層的に変容し、その末端においては、もはやそうした変容の痕跡すら「示さない」現れがそのアイデンティティを主張するようになる、というわけである。ハイデガーは現象の偽や隠蔽の可能性をこうした変容の複雑なもつれに見いだすのだが、それは、現象が自らを語る仕方が——もしくは、根本的には同じ事柄であるが、語りや言葉が示し出す現象が——自らにとって異他的な事柄への関わりや交渉を必然的に含み入れている、という事態へと集約されよう。

(二) 語りの両義性——「存在と時間」序論、第七節B

現象から現れへのこうした変容の可能性は同時に、語りの持つ両義性と関連している。ハイデガーはロゴスに関連するアリストテレスの定義を解釈しつつ、これを次のように定式化する。すなわち、レゲイン（語り）とは、或るものをそれとして公開的に「提示しつつ見させる（aufweisendes Schenken）」ことであり、語ることににおいては「何が語られているか」ということは、それに関して話題になつている事柄から汲み取られるべきであり、かくして、語りつつ伝達するときにはこの伝達は、それに関して語られた話題をその伝達内容のうちであらわにし、他人が近づきうるものにする。」(SZ,S.32) 見させるといふこの開かれた態度によつて、事柄の意味内容の開示とともに、その伝達や共有の可能性が開かれる。が、これは他方で、事象そのものの直接的な相貌を覆い隠すことにもなる。「さらにまた、ロゴスは見させることでもあるゆえに、ロゴスは、真であったり偽であったりすることができる。」(SZ,S.33) 偽りや隠蔽する（verdecken）ことの可能性とは、「或るものの前に別の或るものを（見させるといふ仕方で）立てて、かくしてそれを（実際にはそうではない）当のものと、して称すること（hid）であり、端的に言えば、或る存在者の存在規定に際して、別の存在者が示すそれとの混同をなす、といったことを意味している。この混同は、事柄の説明のために別のそれを援用したり、或いは事

象内容が他者へと伝達される度合い、すなわち現象および現れの場合と同様、或る種の異他性や他者性が介入してくる程度に応じて生ずるのである。

(三) 存在者と存在との差異

前述したように、語られるべき当の現存在が置かれた日常は、諸々の存在者やそれに関する陳述や言明の平均的な意味内容が交差し、互いにもつれ合っているという複雑な様相を呈していた。従つて、実際の現存在分析には、前に示したロゴスの隠蔽傾向に逆らう形で、ひとつの記述上の基準線を引くことが求められることになる。ハイデガーは述べる。「存在問題の理解の最初の哲学的歩みとは……あたかも存在がひとつの存在者という性格を持つているかのように、他の存在者へとその由来を還元することによつて、存在者をそれとして規定しない、ということである。」(SZ,S.6) 具体的に言えば、現存在の存在論的（ontologisch）な構造の記述と、分析上それと同一視されてはならない内世界的（innerweltlich）な存在者に関する存在者的（ontisch）な陳述とを区別し、他の存在者や実体的な哲学概念への方向の定まらない還元や指示を退けて、現存在という範例的な存在者の存在について、その同一軸に沿つて言わばタテ方向へと多層的な解釈を展開すること、こうした方針が『存在と時間』の分析論の大まかなプログラムを形成するのである。

以上のことから、現象を仮象や現れから分かつ基準線、ロゴスの両義性内部での区別がハイデガーの場合、現存在の「存在」と内世界的な「存在者」との差異や区別の問題として展開される、ということが明らかになったように思う。この問題は、現存在の存在構造としての世界—内—存在という実存範疇 (Existenzialien) と、内世界的な存在者についての範疇との記述上の区別にさいして、とりわけ切実な形で際立ってくる。ハイデガーは問う。「《世界》を現象として記述するとは、何を意味しうるのか。」(SZ.S.63) さらに彼は続ける。「……しかしながら、求められているのは何といつても存在なのである。現象学的な意味での《現象》は、形式的には、自らを存在および存在構造として示す事柄として規定されていた。(Ibid.) では、存在者と存在とは具体的にはどのような観点から区別されることになるのであるか。以下ではこの両者が交錯する場面としての「指示現象」を取り上げ、ハイデガーのよく知られた用具分析に立ち入ってみる。

二 指示現象——ハイデガーによる用具分析とその推移

指示連関の問題は分析論をどのような方向へと導くのであるか。周知のようにハイデガーは内世界的な存在者の規定にさいして、即自存在という「事物 (res)」規定をしりぞけ、存在

者をその手もと性 (Zuhandenheit) から、他の存在者との相互連関のうちに捉える。こうした連関の説明のために引き合いに出されるのがハンマーなどの「用具 (Zeug)」である。例えば工作作業という関心事の枠組みのうちでは、ハンマーは釘を、釘は板を指示するといった具合に、指し当たって我々が関わり、交渉するものは「…するための或るもの (Etwas um zu...)」として、自らを他の存在者へと指示する。(vgl. SZ.S.68.) ただしハンマーや釘は、何かのために役に立ち、利用可能であるといった「有用性 (Dienlichkeit)」を明らかにするものの、「何かのため」というその何か、指示によって互いに関連づけられ、或いは意味づけられる工作過程の全体的な「用途性 (das Wozu)」を必ずしも示すわけではない。(vgl. SZ.S.78.) なるほどハンマーは、釘を打つのに有用であるとかいった形で自らを釘へと指示するわけだが、それぞれの用具が出来事の大まかな連関のうちで有意義に (bedeutsam) 用いられ機能するためにそれにふさわしいポジションや適所性 (Bewandnis) がいかにして与えられるか、といった指示「全体性」を包括的に開示するわけではないからである。個々の存在者との交渉やその考慮、或いはその理解にとつての適切なポジションや場面形成を先行的に牽引しているのは、ハイデガーによれば、現存在にとって「特有な見ることの様式 (eigene Sichtung)」つまり「配視 (Umsicht)」である。「適所を得させる (Bewendelassen)」こととしての配視は、ただ単に

物事の有用性や適所性へと注視するのではなく、むしろ現存在の指示連関の全体的な色合いを構成し、連関の理解全体性、世界―内―存在することの内容的な方向づけや概観を規定する。この場合配視は、或るものがそれ「として」(als)「表立って」理解される以前に、そうした理解可能性を分節化するための先行地平として働くものであり、こうした「予視(Vorsicht)」は個々の存在者の把握に絶えず先立っているとされる。かくして、全体へと伸び広がっているこの配視の地平的な「視野」の存在構造が、個々の存在者間における指示連関へと限定されない可能性も暗示される。

この場合、視野が含意する全体的な広がりには、見られる存在者の側の総体を意味するものではない。というのは、内世界的な存在者が示す指示現象は、それらの持つ「存在者的な」性質へと還元されるわけにはいかないからである。(Vgl.SZS.83) 用具の有用性、指示連関におけるその適所性、そして指示現象の配視的な構造、これらを言わば媒介項として間にはさんで、結局のところ現存在が「本当に見る」のは何か。ハイデガーによればそれは、世界―内―存在することそれ自体の「何のために(=用途性)」すなわち現存在のその都度の「存在可能性」である。世界といかに関わり、いかにこれを理解するか、現存在とは、各自がこうしたテーゼを存在論的に構造化している存在である、と言える。現存在が世界へと投企する(entwerfen)

こうした存在可能性の地平が、内世界的な存在者がそれ「として」分節化され、ロゴスの公開性を得るための超越論的な条件として機能している一方で、同時にそうした地平自体に関して、特定の存在者への拘束も、外的で偶然的な出来事への限局化も原則として免れていると強調されるのはこのためである。(Vgl.SZS.143-144) 可能存在、或いは解放(Greigabe)という語が示す脱―内容的な「形式性」こそが、存在者が示す指示現象を配視の地平性へと、そして現存在「自身」の存在可能性の問題へと純化するための端緒となるのである。今や記述され、語られるべき「真の」現象とは、この可能性の在りよ、つまり「私」が投企し回収する存在可能性とされる。

以降ハイデガーは、右の指示分析が提供する存在と存在者との区別の基準に基づいて、存在可能性の互いに異なった局面を際立たせる。一方には、内世界的な存在者との言語レベルでの関わりへの現存在の類落状況を、他ならぬ指示連関の変容として反照的に示す、という試みがあり、可能性の非本来的な様態が「世間話」、「好奇心」、「曖昧性」に関して記述される。他方でハイデガーは、死の可能性をそれ自身が自らを示す最も「現象らしい」存在論的な現象として、そして良心の声を最も「真性な」語りとして呈示する。

さて、次に右で指摘した分析の二つの試みの間の差異、そして同時に或る「同質性」を明示し、非本来性から本来性へと推

移する現存在の実存的な深まりが描くひとつの循環を描写してみたい。

三 饒舌から沈黙へ、或いはその逆

—— 現存在の非本来性と本来性

(一) 現存在の非本来性と世間話

世間話、好奇心、曖昧性という類落の三契機は、指示現象と
いかに連関してくるのか。配視に基づいた他なるものへの指示
は、諸対象への配慮(Besorgen)ばかりでなく、他者への顧慮
(Fürsorgen)も含んでいる。互いに気にかけて、忖度し合うよう
な共(mit)存在的な世界へと投げ出されている現存在は、互い
と共に(miteinander)という相互主観的な契機のうちで、角が
落ち平板化した世界理解の平均性に従うように指示されている
存在とされる。ハイデガーによれば、こうした被投的な指示現
象は、世間話として営まれる「伝達」に現れる。何かを伝達す
るといふより、伝達それ自体、すなわち分かち、分配すること
(teilen)を志向するのが、語りの公共的な態度としての伝達な
のだが、彼が言うところでは「伝達が《分かち》のは語られた
存在者への第一次的な存在連関ではなく、むしろ共に在ること
が、互いに語ることや語られる事柄の思慮のうちで動いている。
共に在ることにとって重要なのは、語られている、という事実

なのである。」(SZ.S.168) 世間話の指示現象が見せる動性とは、
語り広め(weiterreden)、語りまねる(nachreden)こと、つまり
自己目的化した伝達であり、この伝達は、或るものについて語
り広めること自体に力を傾注すればするほど、或るものこそう
でないものとの本質的な違いを隠蔽するような動向を示す。
「世間話とは、事象が前もって自分のものとなるのを欠いたま
ま全てを理解する可能性である。」(SZ.S.169)

語り広めの空間性は、ひたすらに事柄の外観のみを注視する
という好奇心に反映される。「好奇心は新たなものを、しかも
そこから改めてまた新たなものへと飛び離れる、それだけのた
めに求める。」(SZ.S.172) それは、そのつど表象可能な存在者
の外見を配慮することであり、事物の現前性へと指示されてい
る配視の動きである。配視はここでは、新たなもの、別の事柄
への指示を「指示」されているのだが、この指示が配慮してい
るのは、互いに代用、代用可能なものへと水平化され曖昧化さ
れた伝達内容である、と言える。「万事を見て取り、万事を理
解している」(SZ.S.177) 現存在が話題にするのは「誰にでも接
近可能で、しかも誰もがそれについて何でも言いうるような事
柄」(SZ.S.173)であって、そこで展開されているのは、外見上
対話に見えるものの、根底において匿名の「ひと」が自同的な
仕方ですすようなモノローグである、と形容しようであろう。
この傾向の時間相をハイデガーは別の箇所です「忘却し、現在化

しつつある予期」と名づけたが (Vgl. SZS.339)、彼によればこれは、時間概念を絶えざる今—継起という空間性から捉えるような、視覚優位の哲学的先入見の支配を意味しているのである。

(二) 現存在の本来性と良心の声

右のような現在時の優位にたいして、死の可能性という実存的経験が開示する「最も固執的で、没交渉的で、追い越し得ない可能性」は、もはや代理も伝達も、そして先送りも無意味なものとして、それとは別の「現在」を切り開く。死の可能性とは、未だ現前しない将来的なものであるが、同時に、いかなる瞬間においても起こりうる現存在の存在「不」可能性でもある。際限なく連続され伝達され、そして遅延される現在という時間表象とは逆に、「まだ—ない」と「もはや—ない」という非存在の二側面から来るひとつの「切迫」が、現存在の剥き出しの事実性の引きうけを否認無しに迫ってくる。(Vgl. SZS.250-251) 無論、ここでも現存在は何かに向かうように指示されているのだが、それは、存在者的な関わり、例えば経験的事実として語り広められ、伝達されることによって一般化してしまう死についての公共的ディスクールにたいしてではない。それぞれの現存在自身にとって避けることが出来ず、そしてそれ故に最も確実な死の可能性は、忘却されることが許されない。他に責任転

嫁しえない「私」の存在可能性が、あらゆる事柄に先行し (vorlaufen) 反復されるべき可能性として引きうけられねばならない。右のふたつの非在が語りかけ、迫ってくるのは、分有可能な言説とは対極にある「沈黙」であり、先送り不可能な或る決断の場面であり、ハイデガーはこの言わば一次元的な時間相を「瞬視 (Augenblick)」と呼んだ。瞬視におけるロゴスの形式、それは良心の呼び声であり、しかも、もはや伝達によって公共化される「我々」ではない「私」自身の声であるとされる。「呼び声は勿論、我々によって計画され準備されたり、ましてや自発的に遂行されたりするものでは決してない。《それ (es)》が呼ぶ、しかも期待や意志にさえ反して呼ぶのである。他方で呼び声は疑いなく、私とともに世界のうちに在る他者から来るのではない。呼び声は私から、しかもなお私の上へと来る。」 (SZS.275)

以上のことから、現存在の本来的な様相における指示現象は、世間話を促すような間延びした表象空間ではなく、未だ自己のものではない存在可能性を、まさにその不在のままに現前に据えるという瞬間的な場面として明らかにしたように思う。だがこのことは、自己が自己に聞き入るといふ、別の仕方のモノローグをもたらずのではなからうか。

(三) 伝達すること——我々から私、そして再び我々へ

ハイデガーは、良心の呼び声と、いわゆる通俗的な良心体験との区別を主張する。自己が発する呼び声に聞き入ることは、内省的な直観の閉鎖性へと帰着するわけではないし、他方で沈黙がもたらす無の経験は、歴史的脈絡の外部へと何かしらの飛躍を果たすことを意味するものでもない。声を心理学的な経験事項と考えることも、それを或る超越的状态と見なすことも、ともに「あの現象的実情をあまりも性急に飛び越えている」(ibid.) のである。

あの現象的実情という言葉が指しているのは無論、現存在が「世界—内—存在すること」に他ならない。厳密には、良心の声が開示する当のものは、声が促し指示する事柄の中心ではなく、世界—内—存在することの或る特有な仕方 (das Wie) である、と言うべきであろう。これは「被解釈性から、また被解釈性のために発言する」という例のテーゼがここでも依然として妥当する、ということの意味している。現存在は、世界—内—存在するまさにその具体的状況から呼びかけられ、またこの世界—内—存在することへと向けて呼び進められるのである。(vgl. SZS, 300)

だが再びここに問題が生じる。良心の声が現存在をそこへと指示する意味地平は、その日常的な指示連関とは異なったものであろうか。現存在の頹落状況とは異なった形で、何か別次元

において本来的可能性が開示されるのであろうか。おそらく否である。ハイデガーによれば、呼び声への現存在の応答 (Erverung) もまた、現存在が依拠しているその具体的な歴史状況に即して、そしてここから継承され汲み取られるものであり、応答することの決意は「《現実性》から身を引くのではなく、むしろ事実的に可能なものをはじめて暴露する、しかも決意はそれを本来的に存在しうることとして「ひと」が遂行可能であるというふう¹に把握する」(SZ, S. 299) のである。さらに彼は次のようにも表現する。「決意性においてのみ、我々が偶然と呼ぶものが、共—世界や周囲世界から偶然、落ちかかるところが出来る。」(SZ, S. 300) 私にもたらされる本来的なものの経験や宿命 (Schicksal) は同時に、我々が立つ共—存在的な意味地平に即した「歴史経験」とも見なされなければならない。良心の声は、歴史的に伝承されてきた遺産が本来的に継承される諸可能性を照らし出す一方で、そうした諸可能性は、意味地平の相互主観的な連関からして、同一の歴史的状况を共有する「世代」へと伝達され指示される——送ら (schicken) れる。——べき「運命 (Geschick)」という相貌を呈しながら、再び存在者の現前性を回復するのである。(vgl. SZ, S. 382-387)

極端に言えばこうなる。外見上そう見える声の内存在や超越性は、現存在が世界—内—存在することの実存範疇へと還元される。現に—在ることの「裸の事実性」の引き受けは、現

実からのいかなる後退や飛躍も意味するものではないからである。が、この「現実」とは何であったか。それは各人が置かれた今—この歴史的コンテキストであり、諸々の内世界的な存在者や他者との繋がりが見せる共—存在的な「指し当たってたいてい」の指示連関であった。良心の声もまた、こうした指示連関に即して語られねばならない。それは「声」の表明の可能性、しかもその公開的な表明と伝達の可能性を意味し、そしてここから「我々」の伝達を否定する形で取り出された「私」の本来的可能性が再び「我々」の具体的状況へと還帰する可能性も生じてくる。一見多層的に見える現存在の存在構造のこうした「単層性」によって明らかになること、それは非本来性と本来性それぞれの局面が互いに結びつき、ひとつの循環を描いているということであり、現存在が展開する自己叙述のモノローグ的な性格が、最後まで払拭され得ないということなのではないだろうか。

四 何処から、また何処へと語られるべきか

— ロゴスの伝承、継承、伝達

ここまで来れば次のような見解も自然と出てくる。すなわち「我々」から「私」を経由し再び「我々」へと還帰する自己解の循環は、結局、或る「共同体」が共有する歴史的意味地平

の自明性の強化や民族的なディスクリールの正当化につながるのではないかと。だがハイデガーは、現存在が参与すべき歴史的「状況(Situation)」の内容に関しては「現存在がそのつど事実に何にたいして決意するかということをも、実存論的分析論は原則的に論究しえない」(SZS388)と述べる。歴史経験の生起において伝達されるべき「何」は——声の「形式性」からして——存在者のな次元へと表明化され、表立って主張されているわけではない。

けれどもなお、このことによって現存在の自己叙述の自同的な構造が克服されていると見なすわけにはいかない。叙述の解の積学的循環の流れは、伝達されるべき内容についての積極的な主張を控えるかわりに、そうした伝達がどこから、またどこへむかつてなされるべきかという形式上の方向性を際立たせる。無論それは、右で述べた現存在の自己触発的な循環構造を指している。世界現象が、指示し指示され、または互いに伝達されるという共—存在的なネットワークの地平から説明され、しかもそうした地平が終局的には、私(我々)が私(我々)の声の聞こえという声の自同性に基づいているということ、こうしたことが示唆するのは、結局、個々の存在者や他者の外部性や異他性の問題系が、これらを世界—内—存在の共—存在的な地平へと結びつけるハイデガー的な問題設定によって、そもそもその初めから解決の方向が確定されているかのような概観を呈し

ているということであり、『存在と時間』の方法論それ自体が、自己同一化傾向をみせる現在の優位性という伝統的な哲学的先入見を払拭しきれていない、ということなのである。「私」が二つの「我々」の間の言わば折り目のような契機となつている点を考慮するならば「現存在とは誰か」という問いにたいするハイデガー自身の回答も、必ずしも明確なものではないと言えるであろう。翻つて逆に、次のような問いも立てられてしかるべきである。つまり、或る歴史的可能性がロゴス化され、その公開的な指示性格によつて「本来的に」伝達されるとして、それを受け取るべき「我々」とは「誰のことか」と。

無論、これはハイデガーの問いではない。伝達、しかも日常的な「世間話」として各人が取り交わす伝達内容ではなく、むしろ互いに継承するという仕方で形成されてきた「影響作用史的」(ガダマー)な歴史連関を持つ伝達の形式は、半ば自明視され、或いは主張されもしている。いかなる歴史経験も各人の個人的体験ではありえない。ハイデガーは述べる。「同一の世界のうちで共に互いに在ることに於いて、また特定の諸可能性にむけての決意性において、諸々の宿命はもともと既に導かれてゐる。」(SZ.S.384)別の箇所では次のようにも言われる。「決意性のうちには実存的な不断性が横たわつており、この不断性はその本質上、決断性から発現するあらゆる可能的な瞬視を既に先取りしてしまつてゐる。」(SZ.S.391)歴史の諸連関、或いは

は「全体的実存の伸び広がり」(Vgl. SZ.S.390)を先行的に導いているもの、それは、伝承や継承、伝達によつて共に存在的に構造化されている、テクストとしての現存在の断絶なき統一性なのである。歴史のコンテクストのこうした不断性は、様々な歴史事象がその本来的な可能性において捉えられロゴス化されるための——そしておそらく、同時にその隠蔽の可能性の——基盤となるものであろう。

中期以降のハイデガーの思索のうちでは、これまで述べてきたようなロゴスの両義性、そしてこれに関連した現象と現れ、暴露と隠蔽、真性と偽性、存在と存在者といった様々な対概念は、「非覆蔵性(Unverborgenheit)」と覆蔵性という、存在そのものの持つ両義性へとシフトしてゆくように見える。「真理」の生起もその忘却の歴史も、存在それ自体が展開してみせる普遍的な「存在史(Seinsgeschichte)」を叙述している限りにおいて、ここでは右で指摘した歴史連関の不断性や統一性が「存在と時間」よりさらに強調される結果になつていると言えよう。

とはいえこの存在史は、或る決定済みの歴史内容を主張するのでも、或いはテクストとしての現存在の歴史連関の一義的な理解を迫るわけでもない。同様に、存在の意味への問いを試み、或いは存在それ自体が顕現するトポスを共有するであろう「我々」とは、決して限られた共同体的な集団を指すのではな

い。以下に引用するハイデガーの言葉が暗示しているように、問いが立てられる意味地平としての歴史連関は、思索する者全てに権利上開かれてあり、そしてそれらが伝達される形式も——それはまた「至るところにあり、かつどこにもない」⁽³⁾という最もラディカルな仕方 で存在しているのであるか——一様ではないはずである。

「……私たちの対話は、一つの固定したプログラムをくりひろげるといふ課題を立てるものではありません。しかし、私たちが存在者の存在と命名するところのものによって私たちがそのうちで言いもとめられている一つの集りのために、その対話にくわわるすべての人の心を準備するよう努めたいものです」⁽⁴⁾

注

ハイデガーの著作および講義録からの引用はすべて以下の略号と頁数で示した。なお引用文における強調は原文ではイタリック体になっている。

GA21: M. Heidegger, *Logik, Gesamtausgabe*, Bd. 21, Frankfurt a. M. 1976 (以下GA21と略記)

GA63: M. Heidegger, *Ontologie (Hermeneutik der Faktizität)*, Gesamtausgabe, Bd. 63, Frankfurt a. M. 1988 (以下GA63と略記)

SZ: M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Tübingen 1993 (以下SZと略記)

(1) 以下の議論についてはSZ,S.28-31を参照。また本稿と同様に、前期ハイデガーの言語論を現象と現れとの区別に関連づけているものとして、赤松宏「ハイデガー哲学と言葉の問題——ニーチェとの関連性——」『哲学』二十一号、一九七〇年が注目される。

(2) ハイデガーが「自我」に関するカントの説明をたとえ留保付きであっても積極的に見て取るのは、カントが自我を何らかの実体へと存在者の還元することなく、純粹にその形式、つまり「表象作用の形式的構造」において捉えている、と見なしているからである。SZ,S.310-320を参照。

(3) これは歴史解釈、或いは解釈学的な営みが展開されるトポスの性格について、初期ハイデガーが用いた表現である。GA63,S.62を参照。勿論、厳密に言うならこの表現が中期以降のハイデガーの思惟に当てはまるものでないことは筆者も十分承知している。

(4) M・ハイデガー「哲学とは何か」ハイデッガー選集7、原佑訳、理想社、一九七九年、三九頁。

(にゅうやしゅういち 現代思想文化学・博士後期課程)